

日独形容詞比較研究

—色彩を表す形容詞の比喩的 意味機能について—¹⁾

筑波大学 人文社会科学研究所 伊 藤 眞

0. 序 論

本論では、慣用句の構成要素として用いられている色彩を表す形容詞が、日独慣用句の中でどのような意味機能を担っているかを比較分析し、日独慣用句における形容詞の意味的共通点および相違点を明らかにする。具体的には、日独慣用句の中で形容詞が表している比喩的意味機能 (lexikalische metaphorische Bedeutung) を中心に考察することにする。²⁾ 従来の慣用句対照研究において、構成要素の比喩的意味機能を分析する場合、考察対象とされてきたのは、もっぱら、慣用句の構成要素として多用される身体部位(目、頭、耳、手、足など)や動物を表す名詞(犬、ネコ、馬、キツネなど)であり、本論のように、慣用句の構成要素として用いられている形容詞を考察の中心に置いた研究はほとんどなかった。³⁾ その一方で、形容詞が慣用句を構成する要素として重要な

1) 本論文は平成 15 年度獨協大学国際共同研究研究助成を受けた研究成果の一部である。

2) 筆者は、慣用句の表す意味は、慣用句の中核的構成要素が担っている比喩的意味機能と、慣用句の具象性 (Bildhaftigkeit) というふたつの要因が関係しあって成立しているという立場をとっている。本論では、慣用句の構成要素として用いられている形容詞を考察対象としているために、このふたつの要因のうち、構成要素の比喩的意味機能に限定して検討することにする。なお、これら慣用句の意味を成立させているふたつの要因について、詳しくは、例えば Itoh (2005) を参照。

3) 形容詞を分析対象としているものとしては、例えば、Dobrovolskij, Piirainen (1996) がある。ここでは、ドイツ語、オランダ語、英語、ロシア語、日本語の慣用句の構成要素として用いられている形容詞、動物を表す名詞、数詞が、言語学的観点と言うよりも、文化記号論的立場から比較分析されている。

位置を示していることは紛れもない事実である。そこで本論では、慣用句に用いられている形容詞に焦点を絞って分析を行うことにする。その際、Itoh (2005) において提案された分析方法を援用し、この分析方法が形容詞にも効果的に用いることができることを示してみたい。

1. 構成要素の比喩的意味機能

具体的な分析を行う前に、慣用句の構成要素の比喩的意味機能について、以下の慣用句を用いて、簡単に説明しておきたい。

(1) a. 腕を磨く

… 現在もほとんどの選手がイタリア、ブラジル、ギリシャなどのプロ・リーグで腕を磨いている。

毎日新聞 1998. 11.26 朝刊 25 頁

b. 腕が上がる

… 「お陰で、バーテンダーの資格が取れるほどカクテル作りの腕が上がった」

毎日新聞 1999.4.2 夕刊 13 頁【大阪】

ここに挙げた日本語慣用句は、それぞれ用いられている文脈から判断して、例えば「腕を磨く」は、「技術や技能を向上させる」を、また「腕が上がる」は、「技術や技能が上達する」を意味していると判断できる。このことから、これらの慣用句において、「腕」という身体部位は、「技術・技能」という比喩的意味機能を果たしていると考えることができる。このことは、例えば、上記のテキストにおいて、構成要素「腕」を「技術・技能」という表現と置き換えてもテキストの文脈を損なうことはないということからも確認することができる。このように、それぞれの構成要素が、慣用句の表す意味との関係から、慣用句の中で担っている意味機能を、本論では「比喩的意味機能」と名付けることに

する。⁴⁾

次にそれぞれの構成要素の比喩的意味機能を設定する方法を考えてみよう。比喩的意味機能を設定する方法としては、上記のように、当該の構成要素を、慣用句の用いられている文脈から判断し、別の表現と置き換えてみる。もし置き換えられた表現を用いても、慣用句が用いられている文脈の意味内容が損なわれない場合には、その表現がその構成要素の比喩的意味機能と認めることができる。このことから、上述のように、構成要素「腕」には、「技術・技能」という比喩的意味機能を設定することができるのである。

このように、構成要素の比喩的意味機能を設定する場合には、特定の構成要素を対象とした置き換えテストが重要な役割を果たしていると言うことができる。⁵⁾

ところで、この比喩的意味機能を設定するための前提として、慣用句のそれぞれの構成要素と、慣用句全体の表す意味との間に、ある種の対応関係が認められることが挙げられる。即ち、それぞれの構成要素が慣用句全体の表す意味

4) ここで用いられている「比喩的 (metaphorische)」は、あくまでも、慣用句の構成要素が慣用句の中で担っている意味機能をさしているのである。従って、辞書に当該の意味が記載されているかどうかということとは、直接的には関係しない。ただ、問題とされる慣用句の構成要素の比喩的意味が、一般的に、その構成要素、即ち語のひとつの意味として用いられるようになり、慣用句の中だけではなく、通常の語結合の中でも用いられるようになれば、その意味は、単なる慣用句の構成要素としての意味にとどまるのではなく、ひとつの語の比喩的意味として独立して辞書に記載される可能性も生ずる。また、ここで言う「比喩的意味」とは、即ち、比喩 (Metapher)、換喩 (Metonymie)、提喩 (Synekdoche) 等を厳密に区別した上で、「比喩」という現象を意味しているのではなく、比喩、換喩、提喩などを含めた包括的な意味で用いることにする。また、慣用句の表す意味と構成要素の間の関係については、「比喩 (Metapher)」や「換喩 (Metonymie)」などの関係を認めることができるが、ここでは、「比喩」や「換喩」という区別をあえて問題とはせず、あくまでも構成要素が慣用句の表している比喩的意味機能を指すものとする。

5) この比喩的意味機能の設定方法は、本論で考察対象としている日独語だけではなく、その他の言語の慣用句の構成要素を分析する場合にも応用することができる。また、構成要素の比喩的意味機能を比較の基準とし、異なる言語の慣用句に用いられている構成要素の比較・分析を行うことは、各言語において、それぞれの慣用句の構成要素がどのようなものとしてイメージされているかという、語彙論的・認知的な考察をも可能にするものであり、興味深い分析結果を得ることができよう。

のどの部分を担っているのかが、ある程度、明確に想定することができるということである。反対に、慣用句全体の表す意味と、個々の構成要素の文字通りの意味との間に何ら連想関係が認められないような、極めてイディオム性 (Idiomatizität) の高い慣用句の場合、慣用句全体の表す意味のどの部分をそれぞれの構成要素が担っているかを判断することは難しく、そのような場合には、構成要素の比喩的意味機能を設定することは、事実上不可能である。従って、構成要素の比喩的意味を設定する場合には、構成要素の文字通りの意味から慣用句全体の表す意味を、ある程度、連想することのできる、即ちイディオム性の比較的低い慣用句が考察の中心に置かれることになる。

2. 分析の対象

まず、形容詞が日独慣用句の構成要素として用いられている例としては、以下を挙げることができる。

(2)

日本語慣用句

鼻が高い	腰が低い	
頭が固い	手を汚す	
目を丸くする	目を細くする	等

ドイツ語慣用句

großer Bahnhof einen **hohen** Wasserfall haben
schmutzige Hände bekommen **festen** Boden haben
heiβes Blut haben um den **heiβen** Brei herumreden usw.

次に色彩を表す形容詞が構成要素となっている例を見てみよう。

(3)

日本語慣用句

くちばしが**黄色い** 青二才
 尻が**青い** 腹が**黒い**
 赤の他人 等

ドイツ語慣用句

sich **gelb** und **grün** ärgern **gelb** vor Neid sein
 keinen **roten** Heller etw. durch die **rosarote** Brille sehen usw.

先に述べたように、本論では、形容詞を構成要素にもつ慣用句の中でも、色彩を表す形容詞を分析の中心に置くことにするが、その根拠として、色彩を表す形容詞をもつ慣用句は、通常の形容詞を構成要素にもつ慣用句と、慣用句としての意味を成立させている要因が異なっていると考えられるからである。上記(2)に挙げられた慣用句では、慣用句全体の表す意味は、それぞれの構成要素の比喩的意味から成立しているというよりも、慣用句の「具象性 (Bildhaftigkeit)」から導き出されていると考えることができる。例えば、日本語慣用句の「目を丸くする」を検討してみよう。まず、慣用句の具象性とは、「構成要素の文字通りの意味によって表されている事柄」と定義されるが、日本語慣用句「目を丸くする」の具象性は文字通り「目を丸い形状にする」ということである。この場合、「目を丸くする」という具象性は、驚いたときの顔の表情と関係していると言うこともでき、この具象性から「驚く」という慣用句の意味が成立していると考えられることができる。

また、「目を細くする」についても、「目を丸くする」の場合と同様に、慣用句の具象性から「顔の笑みをうかべる」という慣用句の表す意味が派生していると考えられることができる。このように、「目の形状の変化」という具象性と「感情の変化」という慣用句の表す意味との間には、ある種の対応関係が認められると言うこともできる。⁶⁾ (2)に挙げられているそれ以外の慣用句についても、

6) 「目の形状の変化」という具象性と「感情の変化」という慣用句としての意味との関係は、日本語のみならず、多くの言語の慣用句においても認められるものである。

もっぱら構成要素の文字通りの意味によって示されている具象性から慣用句の意味が成立していると判断することができる。反対の見方をすれば、これらの慣用句では、形容詞を含めてそれぞれ慣用句の構成要素としての比喩的意味機能を設定することが難しいとも言える。一方、(3)の例を見てみよう。(3)に挙げられている慣用句についても、具象性を認めることはできるが、構成要素として用いられている形容詞についても何らかの比喩的意味を設定することが可能である。例えば、「腹が黒い」では、文字通りの具象性「腹の色が黒い」を認めることができるが、それだけではなく、「黒い」についても「邪悪な」という比喩的意味機能を設定することができよう。また「腹」については、「感情・思考の詰まっている場所」という比喩的意味を設定することができよう。このように、色彩を表す形容詞の場合には、それぞれの形容詞が慣用句の中で担っている比喩的意味機能を比較的容易に設定することができることから、本論では、日独慣用句の構成要素として用いられている色彩を表す形容詞を分析対象とし、色彩を表す形容詞が、日独慣用句の中で、どのような比喩的意味機能を表しているか、また、日独慣用句における比喩的意味機能の共通点、相違点についても分析を試みてみたい。

3. 具体的分析

3.1 黒い / schwarz

日独慣用句の構成要素として、形容詞「黒い、schwarz」は以下のような比喩的意味機能を持つと考えられる。

3.1.1 schlechter, boshafter Charakter

(4) eine schwarze Seele haben

Zwischen sieben und fünfzehn hat Hugo im Umgang, ja, der Pflege seines Vaters Erstaunliches geleistet. Er tat sein Bestes, um dessen **schwarze Seele** zu beruhigen und den Erwartungen des Vaters zu genügen.

Frankfurter Rundschau, 31.1.1998, S. 4, Ressort

(5) 腹の黒い

前の佃にしても、今度の安西にしても、茶坊主の腹の黒い、クロスケみたいな奴が、医局長面をしてのし歩くんだ。

米川 (2005) 360 頁

上記のドイツ語慣用句 (4) において、schwarz は、「フーゴーが自分の悪い性格を沈めるために」という文脈で用いられている。また、日本語慣用句 (6) についても、「黒い」は、悪意のあるという比喩的意味を担っていると考えられる。このことから、「schwarz / 黒い」は、日独慣用句において、「悪い、悪意のある」という比喩的意味機能を担っていると判断できる。

3.1.2 Unglück

(6) ein schwarzer Tag

Vor allem das Festhalten an Finanzminister Karlheinz Weimar, aus Sicht der SPD wegen der Schuldenpolitik eine „Fehlbesetzung“, bezeichnete Fraktionschef Jürgen Walter als „**schwarzen Tag**“ für Hessen.

Mannheimer Morgen, 26.2.2003, Ressort: Politik

上記のドイツ語用例では、schwarzen Tag は、「財務大臣の Karlheinz Weimar がその職にとどまることは Hessen 州にとって不幸な日と Jürgen Walter は見なししている」という文脈で用いられており、schwarz は「不幸な」を意味しているといえる。

3.1.3 Verleumdung

(7) die schwarze Liste

Kohl weiß um die Problematik und fordert die Deutsche Telekom AG dazu auf, eine **schwarze Liste** anzulegen, um Betrüger sofort zu

erkennen.

Mannheimer Morgen, 29.1.2003, Ressort

ドイツ語慣用句(7)では、「コール首相がドイツテレコムに対し、ブラックリストを作成するよう求めた」という文脈であり、ここでは schwarz は、ある種の「中傷」という比喩的意味機能を果たしていると判断できる。日本語にも、ドイツ語の eine schwarze Liste に対応する「ブラックリスト」という語彙が存在しており、その意味では、日本語の「ブラック」もドイツ語の schwarz と同様の意味機能を果たしていると考えることができよう。

3.1.4 Pessimistische Einstellung

(8) **etw. in den schwärzesten Farben malen**

Die Vertreter der Anklage, sämtlich republikanische Mitglieder des Repräsentantenhauses, **malen** Clintons Verhalten in der Anhörung über dessen Affäre mit der Praktikantin Monica Lewinsky **in den schwärzesten Farben**.

Vorarlberger Nachrichten, 16.1.1999; Clintons Verhalten „verbrecherisch“

(9) **alles durch die schwarze Brille sehen**

Obwohl auf Einladung der ÖVP ins Land gekommen, sieht Franz-Josef Radermacher die soziale und ökologische Zukunft der Welt nicht durch die **schwarze Brille**.

Vorarlberger Nachrichten, 7.4.1998; Die Welt hat noch eine Chance

上記のドイツ語慣用句(8)および(9)では、それぞれ形容詞の用いられている文脈および慣用句の表している意味との関係から、schwarz に「悲観的な」という比喩的意味機能を設定することができる。

3.1.5 Intensivierung

(10) **sich schwarz ärgern**

Auf der einen Seite gibt es da zum Beispiel den lieben Onkel Erich, der **sich** über seinen Halbbruder Siegfried manchmal **schwarz ärgert**, weil dieser des öfteren Rot sieht. Vielleicht deshalb, weil Halbbruder Siegfried den kleinen Wolfgang aus Hartberg als Hoferben adoptiert hat.

Kleine Zeitung, 6.7.2000; Liebe Familie

(11) **warten können, bis man schwarz ist**

Fahrer, die sich weigern, ihren Lkw selbst zu entladen oder zumindest dabei zu helfen, können oft warten, bis sie **schwarz** werden.

ADAC-Motorwelt 7, 1984, S.16.

上記のドイツ語慣用句では、schwarz は動詞の表す行為を強調している、あるいは程度を高めているという意味機能を果たしていると言える。例えば、(10)では、「怒る」という、そして(11)では「待つ」という行為が schwarz によってさらに強調されていると理解することができる。

以上のことから、「黒い / schwarz」の比喩的意味機能は、以下のようにまとめることができる。

	Deutsch	Japanisch
schlechter, boshafter Charakter	+	+
Unglück	+	-
Verleumdung	+	+
Pessimistische Einstellung	+	-
Intensivierung	+	-

3.2 灰色の / grau

3.2.1 unklar, unbestimmt

(12) in einer Grauzone

Als es darum ging, ob dieses Segelflugzeug über Frankfurt abgeschossen wird? KOCH: Ja. Peter Struck und ich mussten in kurzer Zeit entscheiden, was wir — **in einer** rechtlichen **Grauzone** — im Interesse der Bevölkerung zu tun haben. Trotzdem zieht er jetzt wieder durchs Land und beschimpft mich genauso wie Herr Bökel.

Mannheimer Morgen, 14.01.2003, Ressort: Politik

(13) グレーゾーン

つまり、これらの要件さえ満たせば、利息制限法の制限利息（年 20–15%）を超えても、出資法の上限利息（年 29.2%）までは違法とされない「グレーゾーン」が存在する。出資法には罰則があるが、利息制限法にはなく、消費者金融の大半は、この「グレーゾーン」の利息で貸し付けている。

西日本新聞 2003 年 2 月 15 日、朝刊

(14) 灰色議員

いっぽうで同じくメンサロン疑惑を審議してきた法務委員会は、CPI から告発のあった十三人の**灰色議員**をクロと断定、同規律委員会に議員権はく奪を前提とした調査を求める決議を行った。

ニッケイ新聞 2005 年 10 月 7 日(金)

3.2.2 schlecht

(15) das graue Elend haben

die Waldfrauen gehn zur Arbeit. Anngret streunt zum Kuhsee hinüber. eine Weile steht sie am Wasser, dem Abbild des regnenden Himmels. der Regen raspelt im Schilf. tausend Mäuse nagen an Lebensfäden. nein!. nein!. Anngrets Herzschlag ist stärker als das Todesflüstern. **dieses graue Elend!**

STRITTMATTER, OLE BIENKOPP, Roman. Aufbau Verlag, Westberlin, 1963, S. 173

(16) 灰色の人生

頑張る理由が何も無いから苦勞に絶えられない。いかに充実感を得られる、いかに頑張れる人生を送るか。そんな価値観がないから生きられないんです。生き甲斐もなく、年を取って仲間もいない、自殺も出来ずに**灰色の人生**を送る人が何百万人もいます。こんなに物質的に豊かでありながら、日本は本当にひどい国になりました。

千葉商工会議所 経営談話室 Vol. 34

上記のドイツ語慣用句 (15)、(16) において、「grau / 灰色」には、比喩的意味機能として、「悪い」を設定することができよう。

以下の表が示しているように、日独慣用句において「grau / 灰色」には、共通の比喩的意味機能が認められる。

	Deutsch	Japanisch
unklar, unbestimmt	+	+
schlecht	+	+

3.3 バラ色 / rosa

3.3.1 gut, positiv

(17) **etw. durch die rosa[rote] Brille schauen**

Laut einer Studie von US-Experten leben Optimisten länger und sind gesundheitlich besser drauf als Pessimisten. Die Erklärung: Wer bevorzugt **durch die rosarote Brille schaut** und sich auf die Zukunft freut, tut auch etwas für sein Glück.

Mannheimer Morgen, 26.2.2002; Optimisten leben länger

(18) バラ色の人生

街角で見なくなって久しい紙芝居だが、これを昨年末、自民党幹事長の武部氏たちが東京の街頭で演じた。架空の「あすなろ村」を舞台にして、郵政民営化の利点を語る物語。**バラ色の人生**ならぬ、**バラ色の郵政民営化**で

ある。

中日新聞 中日春秋 2005年7月6日

	Deutsch	Japanisch
gut, positiv	+	+

上記のように、日独慣用句において、「バラ色」は、もっばら、gut、positiv という比喩的意味を示しており、この比喩的意味機能は日独慣用句で共通している。

3.4 赤い / rot

3.4.1 Intensivierung

(19) **keinen roten Heller**

Winnie hatte eine alte Aktentasche mitgebracht, in der er das Geld wegbringen wollte. „Ich habe noch **keinen roten Heller** in meinem Leben durch Liegenlassen verloren — und auch nicht durch Überfälle“, fügte er mit einem Lächeln hinzu.

Mannheimer Morgen, 30.11.2002; Die Augen der Mrs. Blynn

(20) **赤の他人**

明治時代からやってきている話で、大体この支庁制度の所管区域を設定するのに、人にいちいち聞かねばならない、それも**赤の他人**の審議会に何年間もかけて検討させなければならないということが、根本的におかしい。自分たちの組織です、自分たちの行政組織。支庁といえは道庁の所謂本当に地域における最重要機関です。

北海道議会平成13年度決算特別委員会議事録 H14.11.8

(21) **真っ赤なうそ**

日本には非核三原則があるのに、駐留米軍が核を持っているかチェックすることも出来ない。これでは平和国家なんて**真っ赤なうそ**。日本は属国で

はない。

Mainichi Interactive 毎日新聞 2005 年 8 月 27 日

(22) **赤恥をかく**

約束を守ってれば、カヴァルカンチ下議は議長選に立候補しなかったと、コレイア PP 党首は述べた。議長が得票した三百票は半分が野党で、あと半分は連立与党の票だった。グリーンハルフ下議は第一次で二百七票を得たのに、決選では十二票少ない百九十五票で**赤恥**をかかされた。

ニッケイ新聞 2004 年 2 月 23 日

3.4.2 **wichtig, besonders**

(23) **etw. rot im Kalender anstreichen**

Wie in jedem Jahr ist das Einsammeln der Tannenbäume ein Termin, den der Nachwuchs **rot im Kalender anstreicht** und mit Freude erwartet. „Größtenteils beteiligen sich die Mitglieder aus der Jugendfeuerwehr an der Aktion, nebst den Aktiven, die als Betreuer mitlaufen.“

Mannheimer Morgen, 13.1.2003, Ressort

「赤」については、Intensivierung、即ち、「赤い」という形容詞によって修飾される名詞(事柄)を強調するという比喩的意味機能が認められ、この機能は日独慣用句において共通していると言える。

	Deutsch	Japanisch
Intensivierung	+	+
wichtig, besonders	+	- ⁷⁾

7) 日本語においても「赤丸急上昇中」というような俗語的表現が認められるが、この場合、「赤」は *wichtig, besonders* という比喩的意味機能を示していると考えられることできよう。

3.5 緑の / grün

3.5.1 gut

(24) auf keinen grünen Zweig kommen

Auf vielen Zettelchen und gern besuchten Vorträgen gibt er freizügig wichtige Erkenntnisse weiter, so auch seine „Blattstellungslehre der Pflanzen“ und seine in München verbreiteten Ansichten von der „Auffaltung der Alpen“. Er **kommt auf keinen grünen Zweig**, kann keinen Profit aus seinem unveröffentlichten Wissen schlagen.

Mannheimer Morgen, 15.2.2003, Ressort

(25) 隣の芝生は青い

個別ポイントベアも時短も「隣の芝生は青い」式に言われても困る、というのが経営側の本音だ。

毎日新聞 1998. 2.25 朝刊 3頁

3.5.2 unreif, unerfahren

(26) noch grün hinter den Ohren sein

Der Junge, der **noch grün hinter den Ohren ist**, aber meint, die Kinder seiner Klasse mit unverschämten Sprüchen schikanieren zu können, er gehört ebenfalls zu jener Spezies unangenehmer Mitmenschen.

Mannheimer Morgen, 9.3.2002, Ressort

(27) 青二才

おまえたちのような年端のいかない**青二才**に何がわかるというのだ。

林 (1992) 6頁

上例のように、「緑 (grün)」については、gut という意味機能においては、日独両言語で共通している。用例 (25) では、「隣の芝生は青い」のように、「青い」という形容詞が用いられているが、この場合、「青い」という形容詞は、「緑」という意味で用いられていると考えられる。日本語では、「緑」という色

彩の意味でも「青い」という表現が用いられる場合がある。従って、ここでは、「青」は「緑」という色彩を表していると判断する。一方、*unreif, unerfahren* という比喩的意味は、ドイツ語では *grün* によって表されるが、日本語では用例 (27) のように、やはり「青」という色彩で表されている。しかし、「青二才」の場合は、「青」は「緑」の意味で用いられているのではない。この場合の「青」は「青あざのある」という意味に由来しているので、日本語慣用句の「緑」には、*unreif, unerfahren* という比喩的意味機能は認められないと判断できる。

日独慣用句の「緑 (*grün*)」の比喩的意味機能は、以下のようにまとめることが出来る。

	Deutsch	Japanisch
gut	+	+
unreif, unerfahren	+	-

3.6 黄色い / *gelb*

3.6.1 *neidisch*

(28) *gelb vor Neid werden*

Zwei Mal hat Ballack Gelb gesehen — und muss nun, **gelb vor Neid**, zusehen, wie das Finale ohne ihn gespielt wird. „Es wird sehr bitter für ihn werden“, hat Franz Beckenbauer gesagt — bitter wie gelbe Galle.

Mannheimer Morgen, 27.6.2002, Ressort

3.6.2 *unreif, unerfahren*

(29) くちばしが黄色い

彼らにとってくちばしの黄色い評論家の一人や二人、黙らせるぐらいたやすいことであつたに違いない。

米川 (2005) 150 頁

「黄色 (gelb)」を構成要素に持つ日独慣用句は、それほど多くはないが、比喩的意味機能としては、以下のものを設定できる。

	Deutsch	Japanisch
neidisch	+	-
unreif, unerfahren	-	+

4. 結 語

本論では、日独慣用句の構成要素として用いられている色彩を表す語の中から、中心的なものを分析対象とし、中核的な比喩的意味機能について比較対照した。色彩語の比喩的意味機能の中には、日独慣用句において共通するものも少なくない。本論で扱った色彩語以外にも、日独両言語の構成要素として用いられている場合があり、それらについては、機会を改めて考察することにした。

参考文献

- BURGER, H. (1998): *Phraseologie*. Berlin (Schmidt).
- BURGER, H. / BUHOFER, A. / SIALM, A. (1982): *Handbuch der Phraseologie*. Berlin, New York (de Gruyter).
- DOBROVOL'SKIJ, Piirainen (1996): *Symbole in Sprache und Kultur, Studien zur Phraseologie aus kultursemiotischer Perspektive*. Bochum.
- DOBROVOL'SKIJ, D. (1997): *Idiome im mentalen Lexikon. Ziele und Methoden der kognitivbasierten Phraseologieforschung*. Trier (Wissenschaftlicher Verlag).
- FLEISCHER, W. (1997): *Phraseologie der deutschen Gegenwartssprache. 2. durchgesehene und ergänzte Auflage*. Tübingen (Niemeyer).
- FÖLDES, C. (1996): *Deutsche Phraseologie kontrastiv. Intra- und interlinguale Zugänge*. Heidelberg (Julius Groos).
- 林 史典 編 (1992): *現代国語用例辞典*. 教育社。
- 伊藤 眞 (1996): *Phraseologieforschung — Bildliche Entsprechung zwischen deutschen und japanischen Phraseologismen*—ドイツ文学 96 号 日本独文学会。57～65 頁。
- 伊藤 眞 (1997): *言語の具象性・比喩性・受動性～日・独慣用句をめぐって～ヴォイスに関する比較言語学的研究* 三修社 251～297 頁。
- 伊藤 眞 (1999): *慣用句の意味の成立要因について* Rhodus Zeitschrift für Germanistik Bd. 15 筑波ドイツ文学会 45～62 頁。

- 伊藤 眞 (2003): 慣用語法対照研究とコミュニケーション。レトリックと慣用語法 対照研究の諸問題—ドイツ語教育の視点から—日本独文学会研究叢書 021、日本独文学会、1-18 頁。
- 伊藤 眞 (2004a): 慣用句対照研究の方法論的考察。次世代の言語研究 III (筑波大学現代言語学研究会) 235-247 頁。
- ITOH, M. (2004b): Phraseologie aus kontrastiver Sicht. Entsprechungen und pragmatische Einschränkungen der deutschen und japanischen Phraseologismen. In: Über die Grenzen hinweg. München (iudicium). S. 211-232.
- ITOH, M. (2005): Deutsche und japanische Phraseologismen im Vergleich. Deutsch im Kontrast Bd. 22. Tübingen (Julius Groos Verlag).
- 井上宗雄 (1992): 例解慣用句辞典。創拓社。
- 尾上兼英 (1992): 成語林。旺文社。
- 奥山益朗 (1994): 慣用表現辞典。東京堂出版。
- PALM, Chr. (1995): Phraseologie. Eine Einführung. Tübingen (Narr).
- SCHOLZE-STUBENRECHT, W. (2002): Redewendungen. 2. neu bearbeitete und aktualisierte Auflage. Duden Bd.11. Mannheim (Duden).
- 米川明彦 / 大谷伊都子 (2005): 日本語慣用句辞典。東京堂出版。
- Wanzeck, Chr. (2003): Zur Etymologie lexikalisierter Farbwortverbindungen. Amsterdamer Publikationen zur Sprache und Literatur. Amsterdam (Rodopi).

Farbbezeichnungen in deutschen und japanischen Phraseologismen

Makoto ITOH

Die vorliegende Arbeit untersucht die Farbbezeichnungen in deutschen und japanischen Phraseologismen aus kontrastiver Sicht. Gezeigt werden soll, welche Gemeinsamkeiten und Unterschiede in der metaphorischen Bedeutung der Farbbezeichnungen (wie z.B. SCHWARZ, GRAU, ROT, ROSA, BLAU, GRÜN und GELB) der beiden Sprachen bestehen. In der bisherigen Phraseologieforschung sind meist Körperteilbezeichnungen als Forschungsgegenstand gewählt worden. Farbbezeichnungen dagegen wurden nur wenig untersucht. Neben Körperteilbezeichnungen sind aber auch Farbbezeichnungen in Phraseologismen als wichtige Konstituenten häufig gebraucht. Diese Untersuchung könnte also in diesem Sinne ein interessantes Thema in der Phraseologieforschung aufgreifen. In dieser Arbeit soll auch gezeigt werden, dass das in Itoh (2005) vorgeschlagene Analyseverfahren auch auf die metaphorische Bedeutung der Farbbezeichnungen anwendbar ist.